

「教える人になること」が教えてくれること

－ 研究者志望から高校教員になった人に聞く「学びと教職観」についての体験的知見 －

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター
伊藤 正信

本研究は、研究者志望から高校教員になった5名の方へのインタビュー分析から、教師の「学びと教職観」に関わる有意義な知見を得ることを目的とする。研究者志望だった方に注目する理由は、その方自身の学びや探究心の深さと「教える側になること」の過程を体験的に持つことに着目している。

方法はカテゴリー分析を用いる。インタビューデータを分析者の解釈と意味づけによって再文脈化し、いくつかの概念を生成する。KJ法を用いてそれらを整理、統合する。

結果と考察では、生成した概念とカテゴリーに対して、分析者の視点から説明を行い、考察を加えた。その中では例えば以下のことが示された。

「指導意識からの距離感」は共通して見られた。指導意識は教職という仕事をする上での責任感や熱意と全て重なるものではない。指導意識から離れながら目的意識的に取り組むことは可能である。「主体性」は重要な要素であり、また、主体性の中身が問われる。自らの主体的な学びが教えることにも深くつながる。教育を「指導」の次元に限定せず人間的な面に自らの教師としての位置を定めることも可能である。

私自身も高校教員であり、「自己インタビュー」という手法で私自身の教職体験の振り返りを行った。これはインタビュー分析の考察を深めるためのものである。さらに、本研究を通じての私自身の教職観の変化をまとめた。そこにはインタビュー分析の結果から私が学んだことが反映されている。